

浪人は考えられない

二月二十三日 日曜日 浪人は考えられない

八時前に起き、西京極へ試合見に行く用意する。
八時四十五分頃家を出たが、はつきり何時何分とは
当てにならない、古い柱時計だから。
テレビはこわれたまま。
修理のお金がない。

中書島の急行に合わせたつもりだったが、
一台前の各停で、さらに、四条京阪まで立ち通し。

試合の時間、聞いていなかったので、
早すぎはしないかと不安だった。

雪が降っている。
風もある。

何か、陰気に感じ、
足が重く、進まない感じ。

英会話のテキストを持っていった。

「このごろ、少し僕はたるんでいる。

この調子ではいかん。

勉強しなきゃあ。」

と思いつながら、体育館へ急ぐ。

「まあ、いい。

尻に火がついた思いを充分したら